

アサボラケ考

小林 賢章

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・教授

となるであろうか。

これらの口語訳をもう少し詳しく見ておく。かつて、萩谷朴が『土佐日記全評釈』を著した時、よあけころの時間経過について、「月のないアカツキの暗黒の空が日出前一時間半くらいからわずかに透明度のあるダークブルー（濃い縹）と替わり、やがて半透明の縹色から朝縹と変わって、日出前三、四〇分頃から空は一面に白みはじめると共に、高い雲がトキ色に染まって来る。」のように述べている。一年を通じて考えると、天文薄明の時間は、日の出前一時間半から五十分ほどの間で変化するから、萩谷の観察は夏の状況のみに対応しており、科学的に精確であるとは言いがたいのだが、古典作品を読むときは大体萩谷の指摘に従えばよいと考える。

萩谷の意見を繰り返すと、日の出前一時間半くらいに夜が白み始め、日の出前三、四十分くらいで、ほぼ、日の出以降の視界が保持されるようになる。これが萩谷の意見である。先に述べた『百人一首』の注釈書類は、アサボラケをほぼ日の出前一時間半ほどとらえていることがわかる。

二

ところがである。各注釈書のアサボラケの注釈を見てみると、「夜がほのほの明けるころ。」（『講談社』）、「夜がほのほのとアケはじめる時分。」（『ちくま』）、「夜がほのほのと明けるころ。あけぼのよりやや明るく、既に夜が明けたと言える刻限をさしたが、後に混同される。」（角川）、「夜がほのほのと明けるころ。元来、あけぼのよりやや明るい時とされたが、定家の頃は両者混同されていたという。」（笠間）

ほぼ二つの意見に集約されることがわかる。前二者と後二者とである。前二者は、「夜がほのほの明けるころ。」（『講談社』）という注釈のみがつけられ、後二者には、その意見とともに、アサボラケの語史が加えられている。

一

『百人一首』31番の歌は、坂上是則の

朝ぼらけ 有明の月と みるまでに 吉野の里に ふれる白雪

である。この歌に対する現行数本の注釈書の口語訳を見ておく。

○ほのほのと夜の明けるころ、まだ空に残っている月が光っているのかと思うほどに、しらじらと吉野の里に降っているしらゆきであることよ。（有吉保「講談社学術文庫」）

○夜がほの白くなって、有明の月かしらと思うほどに、吉野の里に白じろと降っている雪ではある。（鈴木日出男「ちくま文庫」）

○夜がほのかに明るくなってきたころ、有明の月の光っているのかと思うほどに、しらじらとこの吉野の里に降りつもっている白雪であることよ。（島津忠夫「角川ソフィア文庫」新版）

○夜がほのほのと明けるころ、まだ空に残っている月の光がさしているかと思うほどに、しらじらと吉野の里に降り強いている白雪よ。（井上宗雄『百人一首を楽しくよむ』笠間書院）

本稿では、「朝ぼらけ」という単語を問題にする。ここで各注釈書がその時間帯をどのように理解しているかを見ておく。各注釈書の時間表現をまとめると、「夜の明けるのも知らぬげに」（『講談社』）、「夜がほの白くなって」（『ちくま』）、「夜がほのかに明るくなってきたころ」（角川）、「夜がほのほの明けるころ」（笠間）

本稿で問題とする「朝ぼらけ：」の和歌の理解では、冒頭のアサボラケをどう理解するかで、この歌の理解が異なってくるのであり、そのアサボラケを理解するにはもう一つの類似の語アケボノと二つをどう理解するかが問題となる。前節で、萩谷の朝方の検討を紹介したが、萩谷の朝方の時間帯の理解によれば、日の出前一時間半前から、三、四十分前までが薄暮だった。さて従来の研究を紹介しながら、アケボノ、アサボラケなどの語としての理解の実際を紹介する。

アサボラケの理解で紹介しておかなければならない研究は二つあった。石田穰⁶⁾の研究と徳原茂実⁷⁾の研究である。石田の研究は、主に『源氏物語』中のアサボラケの用例を研究し、アサボラケは薄暮の終わり部分、もう夜が明けたと言っていい時分を指すとする。つまり、平安中期にはアサボラケは、明るい時間帯を指して使用されていたのである。一方、徳原の研究は、石田の研究に賛意を表すところから始まる。夜が明けたと言える時間帯を意味していたアサボラケは、定家の頃には、薄暮の前半、まだ暗いイメージを強く持つようになったと主張する。「角川」と「笠間」のアサボラケの中の背後には以上のような研究を根拠として、アサボラケが理解されていたのである。

もう一度まとめとめておく。平安時代中期頃までは、薄暮の前の方がアケボノ、薄暮の後半、というより薄暮の終了時点がアサボラケと理解されていた。それが、平安時代後期には、これら両者が混同されたという歴史を辿るといえるのである。

ここで一つの問題となる。是則は平安時代初期の歌人である。とすると、是則がこの歌を作ったときと定家がこの歌を『百人一首』に撰入したときでは、アサボラケの意味は変化していたことになる。いや、徳原の論文の主題はむしろその点にあった。「朝ぼらけ：」の歌が平安時代に中期にはあまり評価されていなかったのに、平安時代末から高評価を得るようになったのは、アサボラケのイメージが変わり、和歌の理解が大きく変化したことによるとの主張だった。

三

本稿では、この歌の評価の変遷と言った問題には触れることをしない。アサボラケという語は徳原の主張するように、平安時代中期までは明るいイメージを持っていたアサボラケが、平安時代末期には暗いイメージにほんとうに変わったのかを問題とする。国語史的に見た時、アサボラケという語が公任(966～1041)の時代から定家(1132～1241)の時代までの二百年ほどの間で急速に意味が変更されたのかを問題とすることになる。それも、朝方の明るいイメージを持つ語が朝方の暗いイ

メージを持つ語へほんの三十分ほどの時間変更を遂げるのかという意味である。そのためには、まずアサボラケが平安中期には本当に明るかったのかの検討を始める。もちろん、石田穰二の研究を検討することになる。

石田は、『源氏物語』中のアサボラケの用例を検討し、「明けた、と言える頃から明け果てるまで、朝といふ言葉を使へば、朝早い頃である。」と主張する。しかし、たとえば、動詞アケの意味を文字通り夜が明けたという意味に限定して捉えていたり、アカツキを夜明けごろと捉えて、用例を検討しているために、結果としてアサボラケの意味用法をかなり、離れたものと理解していると推量される。今一度アサボラケの用例を検討する理由である。先に述べておくが、「夜のあく」表現も同様で、私にはこの表現も日付が変わる意味であろうと考えている。もう一つ「朝」の問題だが、当時は午前三時以降をアシタと呼んでいた事実も加えておく。

用例の検討に移る。ここでは、石田の検討と比較しやすいように、石田の引用した用例を、石田の検討した順に考察する。石田は、「源氏物語における「朝ぼらけ」の使用例は十九例である。今、その時刻を明示するに足ると思はれる用例を便宜に従つて列挙し、簡単に説明を加へる。」として7例を上げている。

1 朝ぼらけのかたち、いとめでたくをかしげなり。東の対の南のそばに立ち手、お前の方を見やり給へば、御格子二間ばかり上げて、ほのかなる朝ぼらけの程に、御簾まき上げて人々居たり。(野分八七〇)

この文について、石田は、「前文に「日のわずかにさし出たるに、うれへ顔なる庭の露きらきらとして、空いとすこく霧りわたれるに」(八六八)とあるが、これはまだ夕霧が南の町に在った時の庭前の情景である。日が既に顔をのぞかせている。なほ、引いた文に続いて夕霧の望見する秋好中宮の侍女達の姿を写すくだりに「さやかならぬ明けぐれの程云々」といふ文がある。」と述べている。このうち後半の「明けぐれ」については何の説明もついていない。ただ、文旨から推定すれば、「明けぐれ」を夜が明けた時間帯と考えていると推定できる。しかし、アケグレについては既に私見を述べたが、午前三時を過ぎて、有明の月が出ておらず、雨や雪で暗い状況であった。とすると、本文の後の部分にアケグレが描かれているのだから、その前の当該分の時間ではまだ暗かったと推定できる。石田の説明の前半部分も解釈としてよく問題になる部分であった。それは、その前に「あか月方に風すこししめりて、むらさめのやうに降り出づ。」とその時間帯がまだアカツキガタの時間帯

であることが知られる。その後夕霧が「うちしはぶく」と、源氏は「中将のこはづくるにぞあなる。夜はまだ深からむは」とも、「いにしへだに知らせたてまつらざるにしあか月の別れよ」とも言っている。「夜はまだ深からむは」とか「あか月の別れよ」と源氏が言っているのだから、この時間帯はまだアカツキの時間帯、まっ暗であつたはずだ。そこで、『新日本古典文学大系』では、「まだ明け方には間があるだろうに。「日わずかにさしてなどいへども。御格子降ろしたるうちに、かくの給ふ也」(湖月抄)」。この引用した当該文の解釈に何らかの問題があることを指摘している。というより、次の2の用例もそうだが、光源氏の形容句ではなからうか。かかやく姫と同じようである。

ともかく、この用例から推定されるアサボラケの時間帯は、アカツキの時間帯と重なっていた。ここに示した1のアサボラケの用例からは、アサボラケが夜明けごろと判断することは難しく、むしろ、暗い時間帯であると判断される。

2 朝ぼらけの只ならぬ空に、百千鳥の声もいとうららかなり。……山際よりさし出づる日のはなやかにさしあひ、目も輝く心地する御さまの……(若菜上一〇七二)

この文も、「山際よりさし出づる日のはなやかにさしあひ」が問題となる。この句も、「目も輝く心地する御さまの」と光源氏の様子に掛かっている。実際の日の光ではなく、光源氏の形容句であろう。

3 明け果つるままに、花の色も人のかたちどもほのかに見えて、鳥のさへづる程、心地ゆき、めでたき朝ぼらけなり。(絵合五七)

この用例も「花の色も人のかたちどもほのかに見えて」とあるから、夜がすっかり明けているとは考えられない。また、複合動詞「明けはつ」⁽¹⁾は、夜がすっかり明ける意味を持つ「明けはなる」と意味差がある点も注意したい。

4 夜も明けぬ。朝ぼらけの鳥のさへづりを中宮はもの隔ててねたうきこしめしけり。(胡蝶七八四)

前文に、「夜もすがら遊び明かし給」⁽²⁾とあり、それに続いて、4の「夜も明けぬ」と続くから、この「夜も明けぬ」は日付が変わる意味であることがわかり、現

在の夜明けの意味ではないことになる。

5 朱雀院より帰り参りて、春宮の御方々めぐる程に、夜明けぬ。ほのほのとをかしき朝ぼらけに、いたく酔ひ乱れたる様して、竹河謡ひける程を見れば(真木柱)

この用例は男踏歌の場面である。同じような男踏歌の例が、「初音」の巻にあつて、そこには、その時間帯が、「影すさまじき暁月夜に、雪やうく降り積む」とあつた。アカツキに月が照っていることがわかる。この用例も、「初音」の巻と同じように夜があけていないのではなからうか。

6 ほのほのと明けゆく朝ぼらけ、霞の間より見えたる花の色々、なほ春に心とまりぬべくにほひわたりて、百千鳥のさへづりも笛の音に劣らぬ心地して、(御法一三八四)

この例文の前にも、4の例と同じように、「夜もすがら、たうときこにうち合わせたる鼓の声絶えずおもしろし」と、「夜もすがら」の表現が見える。ヨモスガラの終了時点は午前三時であるから、文の連続性を考えると、このアサボラケも薄暮の意味ではなからうか。

7 程もなう明けぬる心地するに、鶏などは鳴かて、大路近きところにおほどれたる声して、いかにとか聞きも知らぬ名のりをしてうち群れて行くなどぞ聞ゆる。かやうの朝ぼらけに見れば、物いただきたる者の鬼のやうなるぞかし、と聞き給ふも、(東屋一八四六)

この用例も、「程もなう明けぬる心地する」とある。これも夜が明ける、明るくなる意味ではない。午前三時になる意味である。さてこの文で面白いのは、すっかり明けているとすると、物売りの姿が「物いただきたる者の鬼のやうなるぞかし」と見えるであろうか。物売りの姿が薄ぼんやりとは見えるが、なにか、不気味な雰囲気のある薄暮(ないし、暗闇)の時間でなければならぬだろう。

以上、石田穰二がアサボラケがすっかり夜が明けた例と考えた用例もそうとは考えられないことを述べた。おそらく、石田の脳裏にも、動詞アクやヨノアク表現が

夜が明けたとの考えが有ったのではないか。

四

徳原茂実は、石田の論に賛意を示した上で、『後撰和歌集』などのアサボラケの用例について、やはり明るい状態であると述べている。それについての反論をここで言うべきだが、論が長くなるので、そのことは後に二三述べるがここでは省略に従う。一つ徳原の論の問題点を指摘しておく。源氏物語のアサボラケの用例が、明るいという石田の論に賛意を示した徳原だから、『後撰和歌集』などの歌が明るいアサボラケであると述べることに問題はない。それが、『拾遺集』『千載集』を経て、『新勅撰集』や『統拾遺集』の歌中のアサボラケまで明るいとなると疑問が生じる。それも、『統拾遺集』の歌の作者が藤原為家であるとすると、アサボラケの意味は『新古今和歌集』時代を下つても明るいとは解されていたことになるからである。この時代アサボラケの理解は暗いイメージに変化していないと、徳原の主張は成立しないのではないか。この点からも、徳原の示した和歌の用例の解釈には、いささか疑問が残る。

徳原の指摘する明るいアサボラケの用例は一言で言う印象批評であった。この視点から徳原の指摘の問題点を二、三見ておく。

始めに、『後撰和歌集』の歌を見る。

- 128 昨日見し花のかほとてけさみればねてこそさらに色まさりけれ
 129 ひと夜のみねてしかへらは藤の花こころとけたる色見せんやは
 130 朝ぼらけしたゆく水はあさけれど深くぞ花の色は見えける

右の三首は、128番が三条定方、129番が藤原兼輔、130番が紀貫之の歌である。これらの歌は、兼輔の自宅の宴会で歌われた歌であることは、『後撰和歌集』の詞書からわかる。これらの歌は、定方の歌集『三条右大臣集』¹²⁸では、128番の歌は定方が「あしたよみ給へりける」歌に対する返歌となっている。同じように、129番の藤原兼輔の歌は、それぞれ「兼輔Ⅰ」では「夜明けにけり」、¹²⁹「兼輔Ⅲ」では「かくあそひあかして、とのもと、まりたまでつとめてのたまへるかへしに」、¹³⁰「兼輔Ⅳ」では「そのよはとまりて、またのあした」にと違った詞書がこの歌には与えられている。右に見られる詞書中の時間を見てみると、「夜明け」と「あそひあかして」は

午前三時になることを意味していた。アシタは午前三時以降、ツトメテは午前五時以降、以上がここに表現されている時間である。128番、130番歌は同じ時に読まれたと思うから、130番の「朝ぼらけ」の時間もそれらの時間帯に含まれると思われる。これらのうちツトメテは、返歌の時間と思われるから、アサボラケの時間はそれより前と思われる。残りの時間帯は全てアカツキの時間帯が読まれている。アカツキの時間帯は原則暗いから、ここでの「朝ぼらけ」も暗いと考えてよいことになる。

次に、『後拾遺和歌集』の歌を見ておく。徳原は、次の歌は、「明らかに是則歌をふまえたものである。」とする。

- 604 朝ぼらけ雪ふる空をみわたせば山のごとに月ぞのこれる

源道濟

徳原はこの時代のアサボラケは明るいイメージであると考えているし、この歌が是則歌の影響を受けているなら、当然、ここでの「朝ぼらけ」も明るいイメージのはずである。それを、「月ぞのこれる」というであろうか。月は暗い空にあるものである。少なくとも、薄暮の空にあるはずである。この歌は、アサボラケの時間帯になると、月はもう沈んでいるが、どの山の稜線も円弧に光っている。それが月に見えるというのであろう。さらに、「月ぞのこれる」が残月の言い換えであるとすると、残月は有明の月のことであり、アカツキの時間帯（暗い）に出ている月だから、この「朝ぼらけ」も暗いイメージを持つことになる。

次に、『千載和歌集』の歌を読む。

宇治にまかりて侍りける時よめる

中納言定頼

- 420 朝ぼらけうぢの河霧たえだえにあらはれわたるせぜの網代木

右の歌について、徳原は、「眺望をさまたげていたのは霧であつて闇ではない。闇の中では霧は意識されず、夜が明けはなれて後初めてたちこめる霧が知覚される。」と述べる。霧の名所丹波に住居を持つ論者にとっては、このような理解は承服できない。夜、闇の中でも霧が流れるのは十分視認できるし、まして、薄暮の状態なら霧を視認することはごく簡単なことなのである。朝霧の中に、網代が絶え絶えに見える、だんだんに見通されていくとこの歌を読みとって何の問題はないのであ

る。そうした立場でこの歌を見ると、「夜が明けはなれた刻限を「朝ぼらけ」と言い据えていることがわかる。」との徳原の指摘のみしかこの歌の解釈はないとはならないのである。

以上、先にも述べたように、徳原のアサボラケに対する意見は徳原自身の感覚に基づく印象批評であった。ここまでで、アサボラケという語は薄暮のイメージを持つていたと思える。おそらくそれも、暗い方の薄暮のイメージであった。

五

こうなつてみると、徳原が、『新勅撰集』

藤原成宗

60 花なれやと山のはるの朝ぼらけあらしにかをる峯の白雲

と『続拾遺集』

藤原為家

276 朝ぼらけあらしのやまのはみねはれてふもとをくだる秋の河霧

の二首の歌を引用し、「とあるのは、いずれも夜の明けはなれたころの眺望と解され、これらに類する例は枚挙にいとまがない。」と評しているが、おおいに疑問であると言えよう。次に平安・鎌倉時代の和歌中のアサボラケの用例を再検討していく必要がある。

八月

399 あさほらけたつきりはらのこまのあしを しの、めはらみにもくるかな

〔能宣一〕

この歌は、「しののめはらみ」とシノノメという語とアサボラケという語が一つの和歌の中にある点である。当然アサボラケとシノノメの同時性が成立する。ちなみに、シノノメは、簾を通して室内から室外を見ているという状態である。ここでのアサボラケは薄暮と呼ぶ時間帯を意味していると考えられるのである。

あか月のしもしろしといふたいにて

287 しもかとてをきてみつれば月かけに みてまかはせるあさほらけかな〔実方集〕

この歌で大切な点は、詞書に「あか月」とあり、和歌に「あさほらけ」とある点である。それにこの歌は冬の歌でもあることが重要である。冬のアカツキ（午前三時～午前五時）はまっ暗な時間帯であった。ここまで、アサボラケは少なくとも薄暮以前であると考えてきた。それが、まっ暗な時間帯もアサボラケであるということがわかるのである。それを「月かけ」と詠んでいることが証明しているはずである。

アサボラケの語源はアサビラキであったことが知られている。さらに、類似の語にアサケ（朝明）がある。すでに、アサケについては、暗い時間を意識して使用されていると述べた。おそらく、アサビラキ、アサボラケについても語の理解の前提として、午前三時になるヨノアク意識があつたのではなからうか。

むま、あせにて、またあかつきにおるれば 進

201 花す、きあさほらけこそこひしけれ うちそよめきてわかれつるけさ〔選子内親王集〕

この歌は詞書に「あかつき」とあり、歌に「あさほらけ」とある。『選子内親王集』は、大体日並み順に歌が配置されていることを考えると、この歌が読まれたのは、八月下旬から九月上旬の頃と推定される。今日の秋分の頃であり、この時、アカツキはまだ暗いと予想される。

夜ひとよ、たうときことき、あかして、暁方に

みれば、よるちりける花のやり水のなみによせ
られて、すわうかひのさまなるに、さくらかひ
となといひてはこれや

43 夜もすがらちりける花を朝ぼらけ あかしの浦のかひかとそ見る（以下略）

〔公任集〕

詞書の「夜ひとよ」と歌の「夜もすがら」はともに一晩中の意味である。ただその終了時点は午前三時であった。その時点までを経過するのが動詞アカスであった。「き、あかして」とあるから、その時点まで話を聞いている。すると、「暁方」に

なっている。アカツキガタはアカツキの開始部分であった。もちろんこの時点はまっ暗である。その時間帯をアサボラケと歌に詠んでいるのだから、アサボラケは薄暮にさえなっていない。本節で『実方集』287番の歌で問題にしたが、アサボラケは、石田穰二の論文が書かれる前は夜が白々とあけるころとされていた。それが、石田論文以降白々明けというより、すっかり夜が明けた時間帯だという主張が行われた。ところが、『実方集』や本歌の用例を見ると、アサボラケは語源とされるアサビラケや類似のアサケと言った語と同様に、午前三時を越えた時間帯を意味して使用されていたのではないか。アサボラケは原則暗い時間帯であり、時として薄暮の時間帯も含んでいる語と理解されていたのではないか。

あかつき月夜に、いし山よりいて給とて、せき
のあなたにて月のいらぬさきにうたひとつとの

たまひければ、ゆきより

383 相坂の関まで月はてらさなむ 杉のむらたち木くらかららん

といひたれば

384 続拾遺 ともに行月なかりせは朝朗 春のやまちを誰に問まし (『公任集』)

この歌では、「あかつき月夜」に石山寺を出発して、「せきのあなたにて」と逢坂の関に到るまでの時間帯を「朝朗」と言っていることがわかる。「あかつき月夜」はアカツキの時間帯を言うのだろうが、こうした寺社詣では、午前三時を過ぎてそう遠くない時間に寺社を出立することは常識であろう。その時間帯を「月はてらさなむ」「ともに行月なかりせは」と詠んでいるから、月が照っていることがわかる。午前三時過ぎという時間帯も、月が照るといふ事象も、その時間帯が暗い時間帯であることはわかる。ここでのアサボラケの用例も暗い時間帯、それも午前三時をそう遠く離れない時間帯を示していることになる。

おほつにとまりたるに、あみひかせて見せんと

て、またくらきよりおりたちたるおのことも

あはれにみえしに

170 朝朗おろせるあみのつなみれば くるしけにひくわさにありける (『赤染衛門集』)

この歌も、時間帯的には前歌までに検討してきた時間帯、午前三時過ぎであろう。

それを具体的に、「くらきより」と言っていることは注目してよからう。

ほうりんにもりたりしに、あか月にしとみを

をしあくる人の、しかのいとちかくもありける

かなといひしに

351 朝ほらけしとみをあくで見えつるは、かせきのちかくたてるなりけり (『赤染衛門集』)

この歌も「あか月」をアサボラケと言っているから、暗いアサボラケであろう。

徳原茂実は、アサボラケの用例を上げた後、「いずれも夜の明けはなれたころの眺望と解され、これらに類する例はいとまがない。」と述べていた。しかし、その実情は以上のように、全くその逆であった。他にも、アサボラケが暗い時間帯を示している用例は、それこそ枚挙にいとまのない状況だが、この辺りで留めておく。

六

以上述べてきたことをまとめれば、アサボラケという語は少なくとも平安時代を通して、暗い時間帯を指して使用される語であった。それもその時間帯は午前三時以降を指していた。アサボラケの語源がアサビラケであり、類似のアサケという語が午前三時以降を意味して使用されるとすると、アサボラケ自身が午前三時過ぎの意味であったと推量される。もちろん、アシタ(朝)は午前三時以降を指して使用されるという前提は必要であろう。アシタが夜が明けて、明るくなった時間帯を指すという意見は成り立たないことをこの論は述べていることになる。

それより何より、石田穰二の論文以来アサボラケは、「明けた、と言へる頃から明け果てるまで、朝といふ言葉を使へば朝早い頃であろう。」という石田の意見は否定されなければならない。平安中期に明るかったアサボラケが、平安末ごろには暗くなったという徳原茂実の意見も同様否定される。平安時代には、原則アサボラケは暗い時間帯であったことになる。

ただ、語史の視点から見ると、アケボノとアサボラケの違いは、おそらく時間帯を重く見るアサボラケと視角性が強いアケボノといった違いがあったのではと私に推測を述べておく。実際の時間帯はそれほど差がないという考えである。ただ、この意見を述べるためにはアケボノの用例の精査が必要であろうから、ここでは、推測を述べるに留める。

用例を精査し、精密な論を立てることでよく知られる石田が、『源氏物語』において、アサボラケを明るい時間帯だと主張することになった根本は、動詞のアク、ヨノアク表現の意味用法を今日と同じにとったことであつた。

今日、多くの時間表現の研究で、例えば日付変更時点の場合場合で動くといった解釈が行われている。また、弧例と言ってもよいような用例から論を立てることが行われていたりする。時間表現の語彙の使用数はきわめて多いという実際を無視すると、弧例に基づいて在らぬ方向に論を展開することが行われることを危惧して居ることを述べて、本論を閉じたい。

注

- (1) 有吉保『百人一首卯』（講談社学術文庫614 一九八三年 講談社〈以下「講談社」と略称〉）
- (2) 鈴木日出男『百人一首』（ちくま文庫 一九九〇年 筑摩書房〈以下「ちくま」と略称〉）
- (3) 島津忠夫『新版百人一首』（角川ソフィア文庫 一九九九年 角川学芸出版〈以下「角川」と略称〉）
- (4) 井上宗雄『百人一首を楽しくよむ』（二〇〇三年 笠間書院〈以下「笠間」と略称〉）
- (5) 萩谷朴『土佐日記全評釈』（一九六七年 角川書店）
- (6) 石田穰二「あけぼの」と「朝ぼらけ」（同著『源氏物語論集』（一九七一年 桜楓社））
- (7) 徳原茂実「朝ぼらけ有明の月と見るまでに」（『武庫川国文』第二十二号 一九八三年 武庫川女子大国文学会）
- (8) 『源氏物語』の引例は、石田論文同様『校本源氏物語』によつた。ただし、前後分の引用は、『新日本古典文学大系』によつた。
- (9) 拙稿「アリアケとアケグレ」（『総合文化研究所紀要』第17巻 二〇〇〇年 同志社女子大学総合文化研究所）
- (10) 拙論別稿を留意している。
- (11) 『三条右大臣集』以下の私家集の引用は、『私家集大成』によつた。またその名称も、同書によつた。
- (12) アシタは午前三時以降である。アサという語は、アシタが複合語を作らない露出形であるのに対して、複合語を作る再使用される被覆形であると考えら

れる。なお、アサケについては、拙稿「あさけ（朝明）考」（『日本文化史論』（一九九七年 世界思想社）所収）

